

義兄の遺品

清水せき子

我が家の押入れの奥に、結婚以来一度も蓋を開けたことのない柳行李やなぎこづりが納まっている。あめ色に変色した柳行李は、夫が結婚と同時に狭いアパートに持ち込んだもので、引越すたびに蓋も開けずにそのまま運ばれ、今の居場所に落ち着いた。

私も古希を過ぎ、柳行李同様古びてきた。

なんとなく身辺を身軽にしておきたいと思うようになり、あちこちを片付け始めた。今はやりの断捨離である。

といっても、何代も続いた旧家というのではなく、一から始めた歴史の浅い家である。あるものといつてもたかが知れている。大して手間はかからない。少しずつ片付け始めて柳行李にたどり着いた。あの中には、義兄あにが身につけていた「ドイツトンビ」というコートが入っていると聞いている。

義兄は五人兄弟の長男で夫の憧れの兄であり、夫とは親子ほど歳の差がある。生きていれば九十歳を幾つか超えているはずだ。

大学在学中に学徒出陣で満州へ出征し、のちシベリアへ抑留され体を壊した。帰国して養生したが、残念なことに惜しまれながら亡くなったということであった。

私が結婚して一、二年を過ぎたころであったろうか。美しい女優さんと大蔵官僚との結婚が週刊誌を賑わしたことがあった。大蔵官僚は妻を亡くしたあとの再婚ということだ。

その数ヶ月後、正月に夫の生家へ集まり年賀状に目を通していたときのことである。

「Aさん（大蔵官僚）の噂を耳にするにつけ、亡き清水君のことが偲べれます」と添え書きされた年賀状に目が留まった。義兄の友人から義父に宛てられたものであった。

義父は息子亡きあとも、二十数年に渡って息子の友人と賀状のやりとりを欠かさなかったのである。

息子の友人たちの活躍を知れば知るほど——生きていれば——との義父母の思いは深まったであろうと、歳を経るほどに思う。その義父が長男の形見の品を、せめて一度でも袖を通してくれたらと末っ子の夫に託した。それがあの柳行李の中の品である。

正式な名称は知らないが「ドイツトンビ」と呼んでいるコートは、金色夜叉の「貫一」や、シャーロックホームズの名介添え役「ワトソン」が身につけているマント風のコートであるらしい。残念なことに、風雅なライフスタイルとは縁遠かった夫は、一度も袖を通すことなく今日を迎えてしまった。

さて……あの「ドイツトンビと柳行李」をどうしたものか。

夫でさえ袖を通すことのなかったものを、娘や孫たちが使うことはあり得ないだろう。残しておいても戸惑うばかりだ。いずれどこかの時点で処分しなければならぬ。

その前に一度見てみたい。押入れから取り出し、そおーっと蓋を開けてみた。初めてみる、義兄の遺品。

我われの結婚以来とすれば47年ぶり、義兄が亡くなってからずっとこの行李の中だったとすれば、実に70年ぶりに外気にあたるドイツトンビである。

私は浦島太郎を生きたコートを手にとり、思いのほか古さを感じさせないコートを体に当て鏡の前に立った。

と、瞬間、義兄がコートを羽織って動き出したような錯覚を覚えた。

会うことの叶わなかった義兄だが、鴨居に掛かる遺影を何度も目にし、いつの間にか私の中に生きている。

今この場に彼がいれば何を語るだろう……。

向学心に燃え、あのころではまだ珍しかった大学生となり東京に学んだ義兄。年賀状を寄こしてくれた友人や週刊誌を賑わしたAさんたちと、ほとぼしる情熱をぶつけ合い、この国の未来を熱く語っていたかもしれない。その青春の日にコート姿で通学したのだろうか。

恋人がいたと聞いていたが、愛する女性との逢瀬にも、このコートを羽織ってかけたのだろうか。さらにこのコートを誂えたのが義母だったとすれば、ものない時代、田舎に住む義母はどうやって手当てしたのだろう。

身につけるべき主を失ったこのコートを、柳行李に仕舞った義父母の心中をおもんばかりながら、今では知ることままならなくなった当時のあれこれを想像し、長く無言の時間を過ごした。

「捨てればいいよ」と義兄はいつてくれる気がする。それでも……やはり、この品を今、処分することはできない。

せめて五人の孫たちに時をみてこのコートを見せよう。そして志を高く持ちながらも、戦争によって道半ばで散っていかざるを得なかった大叔父がいたことを話して聞かせよう。

このコートをどうするかは、その後を決めればいい。

私は充分に外気に当てたコートを、静かに元の場所に戻した。